

文久四年二月十九日より文久四年二月廿日まで

◎二月廿日は文久から元治への改元日

P8311095 right

造築の外(他)、何れも家居棟あらず、乍舗大店少なからず一小都舎というべし、旅亭も相応乍宮美屋なり、但雪の多きには驚けり、商家何れも角柵様のもの或は□張等を設けて雪除けを取建且軒下通行できる様に家作を補強せり、往来雪積り六尺許なる上を踏み堅め通行す、中には店を見得ず、□に入口の通路あるなり、既に旅亭の庭縁より三尺許を離れ三段程に段を附け軒より高く積雪なりて庭入口の扉を埋めたり飛雪の時には庭前もまた雪除けを設ると見へ□先に柱数本を建あり、雨戸も上半は障子紙なり、是また雪の日には戸を鎖ざして□からざらん為なるべし、前書浦奉行佐々木久次郎使者として来る面す、船奉行(薄田又三郎)同断来る、□中にて不面、船頭某可否尋問に來たりし旨、着

の賀として支配向一同来る渡海の手筈猶縷々申談す、本膳、二の膳の外硯蓋(蒲鉾く□物、よせ物)

さしみ躰肴(赤多い井)(鶏卵蒲鉾飯蛸煮附)烏賊味噌合、焼物(大かれい焼)何れも、許多盛り添え実に

P8311095 left

食前、方丈祈り家来一同夫々右に準ぜし設ありし趣、午休にて偶に心付し処、着済限も早からず、且長途に疲れしにより彼是にて、更に断るべきを失念あるより、かかる手数失費を懸けし事大に誤

れり何れ出立の節、茶料等を以て、償うべく命じ□、以後の扱は固く断らせ□□けり○発途以来所経過悉皆高山深谷幽邃(\*一)之地本月初取酪千海岸然天未明無知其□海岸

同得一絶 激浪響来還似籟乱雲□処、即□山不知

取路江浜去輿裡猶為昨日看；

廿日 卯 晴 ◎二月廿日は文久から元治への改元日

監察江連真三郎一行着(本日の積り)を待ち合わせ滞留、清作、□助來り渡海手続等の儀彼方へ申談じ廿三日乗組の積り有し旨、且□港談判別御用留類持参す歟(か)一見の積り□医者兩人市中見物に出し処、一文の古□錢当領限二文の通用にて銀壺朱と相場□三百九拾文

\*「幽邃(ゆうすい、静かで奥深いこと)」

( )内は細字双行(二行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

□印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。

【判読不可】、■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。